

『アフリカン・アメリカン文学』

荒このみ

—「ニグロのイデオム」と想像力—

東京大学出版会 二〇〇四年

少なくともアメリカ合衆国以外に住む地球民にとってアメリカが、もはやホワイト・アメリカンのアメリカではないことは自明である。メディアに溢れる「カラー」たちのパワフルな煌きにわれわれの目はもう十分すぎるほど慣れ親しんでいるし、しかも喜ばしいことに彼らに対する生理的な違和感などとうの昔から磨耗しはじめている。しかし、地球化の大波がもたらそうとするそうした感覚の変容を傍で裏切るかのように、アメリカでは今なお偏見と差別がさまざまな形で再生産され、ともすれば、アメリカが国是として掲げるデモクラシーの前提さえ根本から葬り去りかねない状況にある。

荒このみの新著『アフリカン・アメリカン文学』は、アメリカ社会の根源に拭いがたく刻まれた「傷」であり病弊である「人種」の問題をめぐって、戦後のアメリカ文学が生んだ最大の作家の一人ラルフ・エリスンの『みえない人間』を中心にすえ、作品の誕生に関わる前史から同時代の文化、そして現代の状況までも射程に収めつつ、網羅的に記述した労作である。本書のめざすところはその魅力的なサブタイトル『「ニグロのイデオム」と想像力』の解析にあり、また、そこに込められたメッセージとは、かつて「黒人文学』

と総称されたアフリカン・アメリカン作家の文学を、アメリカ文学史、ゆくゆくは英語文学史のコンテキストに有機的かつ正しく組み込むことにある。この主張はまさに、「ニグロのイデオム」を含みこんでこそ「アメリカの言語」は自立しうるとするエリスンの考えを正確になぞるものといつてよい。

「人種差別」というテーマはそれ自体すこぶる古典的である。だが、古典的であるからこそ逆にその根にひそむ問題性ははかり知れない広がりを含んでいる。世界中のあらゆる場所で「混血（アマルガメーション）」が進行しつつある地球化時代という文脈のもとでは、とりわけ強力な問題提起とならざるを得ない。本書をとおして読者がまず驚かされるのは、すでに死語と思われていた「レイス・リタラチュア」、「ニグロ・リタラチュア」が、アメリカ文学の本流とは本来的に異質なものとして今なお特殊扱いされているという事実である。人間の人間らしさをめぐる限りなく自由な言説の器であるはずの「文学」においてさえ、人種の問題がこのように、あたかも自明のことのようにテーマの中心にせり出してくるあたりが、アメリカ社会が抱えもつ底知れない闇の深さなのだろう。

「オプティック・ホワイト」「カラーライン」「リリーファンタジー」……そうしたアメリカ文学において一際輝かしい希望を託されたエリスンの文学だが、著者がその解読のために提示するキーワードや分析格子は、ことが皮膚の色に関わるだけに化粧品のコピーかと思紛うほど眩く、読者の興味を離さない。それらは、エリスンのいう「イデオム」の概念に必ずしも当てはまるものではないが、それぞれが多様な屈折をはらみ、両義的で微妙なニュアンスを伝えている。

たとえば、「オペティック・ホワイト」——『見えない人間』の主人公が一時的に職をもとめるリバティ・ペンキ会社が開発した塗料には、十滴の黒い液体が含まれ、それがホワイトをホワイト以上に輝かしいものにするという。科学的にも立証できそうなこの架空の塗料が、アメリカ社会で果たしうる意味作用はごく一般の読者にもおおた想像がいく。著者の言葉を借りればそれこそはまさに「アメリカ社会におけるアフリカン・アメリカンの存在証明の比喩」なのだ。

しかし、それらのイメージに対峙し、あるいは背中合わせにある別のカテゴリの分析格子がある。「カラーフォビア」「白い恐怖」「黒い恐怖」…思えば、アメリカ社会にはびこる人種差別に徹底しているのは、「名は体を現す」というドグマティックな認識のあり方そのものであった。それは地球上に存在するすべての差別問題の根源に潜む病弊でもある。アメリカ社会において名とは、身体の表層ないし「カラー(color)」であり、体とは本質すなわち「ブラッド(blood)」ということになるうか。人種差別問題のもう一方の極にあるユダヤ人差別と比べると、アメリカにおけるそれが、いかに特異なものかが理解される。アメリカよりはるかに長い迫害と差別の歴史を抱えもつヨーロッパで、可視的なものと不可視的なものの同一化がこれほどあらわに先鋭化した事例は、少なくとも近代以降は見られない。ナチスドイツにおけるユダヤ人迫害でも、ロシア東欧圏にみられたポグロムでも、身体的表層のある特色が差別意識の原点となることはなかった。その意味で、アメリカの人種差別がいかに原始的な価値観を基盤としているかが察せられるが、しかし、かりに原始

的といつても、所詮は、西欧（ないし白人種）の伝統にたつた醜や善悪の観念、さらには価値ヒエラルキーに立脚した差異化の本能なのである。しかもその現実をますます厄介なものにしているのが、差別する側にも差別される側にもひとしく存在する「恐怖」であり、あるいはまたそれとは逆にルネ・ジラルルのいう「模倣の欲望」である。このように書くと、人種差別の根深さ、悲劇性はますます救いがなく、問題の解決を望むことさえ無意味で、もはや、問題の所在そのものに対する果てしない馴化の道のりでしかないのではないかとさえ思えてくるほどのだ。

著者は、そうした悪しき循環を克服し、真の意味での「自立」をなしとげた作家がエリスンであると述べ、エリスンをして真の自立を可能ならしめた強靱な精神力の陰に、ラルフ・エマソンが唱えた個人主義の理念があつたことを指摘する。では、エマソンのいう個人主義とは何か。著者の説明にしたがつて述べるなら、それはまさに「透明なる眼球」であり、その曇りないブリズムを通して世界と無媒介に接し、神と交感することである。アメリカ・デモクラシーの原点はまさにここにあり、キリスト教的な精神に裏うちされたこの個人主義を介して、エマソン哲学の「自己信頼」という理念が生まれてくるという。

こうして著者は、エリソンの作家としての自立の道を、主として三人の先達すなわち作家のライトとスカイラー、そして黒人指導者デュボイスらとの比較のなかから浮彫りにしていく。

マルクス主義に傾倒し、つねにラディカルな立場に身を置こうとしたライトとうらはらに、独立独歩を守ろうとするエリソンの文学

には、あくまで個人としての立場に立脚した「自己信頼」の精神が息づいていたという。スカイラーの近未来小説『ブラック・ノーマー』は、黒人研究者が開発した「白化」装置が、人々のホワイトとブラックの観念をめぐって皮肉な逆転を引き起こすプロセスを描き出しているが、ここで取り上げられているテーマは、著者の言葉を借りれば、「《白い肌》という表面的な《可視性》を追求した結果、精神という《不可視性》の領域を侵食し破壊してしまう悲劇」である。また、「黒人の文化こそがアメリカの文化である」とし、そこに潜む「頑健な力」にアメリカン・アフリカンの希望をみたデュボイスの思想は、カラーラインを突きぬけ、アフリカン・アメリカンの「二重性」の是認からそれらの融合へと向けてたくましく進むエリスンの「自立」と「デモクラシー」の精神を根底から支える柱の一つである。

著者によれば、エリスンの『見えない人間』とはまさに「自立」の物語である。ここでいう「見えない人間」とは他からそれとして認知されることのない人間を意味する。理想のなかに育ち、理想を自明の理とした一人の黒人大学生が、ある時、資金援助者である白人理事をスラム街に案内したことから放校処分となる。放浪と遍歴のあぐくニューヨークに流れついた彼は、ビル街の地下に閉じこもり、一三六九個の電球の煌々たる光の世界につかのまの自足を求める。彼はそこではじめて、自分がじつは外部の世界すなわちアメリカ社会に対してまったく不可視の立場にあったことを悟る。不可視の立場にあったということは、自立した他者として自分が見られていないことに気づかなかつたことである。ある人間が自分に対して抱く像と、世界が彼（ないし彼女）について描いている像の、ある

いは自分が描く世界の像と世界自身の像との決定的な断絶——。これに類した危機は、けつして主人公一人のものではないし、現にわれわれの日常生活でも大いに起こりうる事態だが、小説の舞台がアメリカというまさに他者の差異化に極度に意識的な社会であるだけにことは恐ろしく悲劇的である。

本書をとおして私がとくに興味をそそられたのは「パッシング」を扱った章だった。なぜなら、それこそは、地球化のなかで「多民族国家」へと変容しつつある日本の将来に大きく浮上しかねない矛盾そのものだからである。「パッシング」の原義は「通行、通過」であり、言い換えるなら、ホワイトとブラックの間のさまざまなレベルにおける「越境」を含蓄する。あるいは「人種混交（アマルガメーション）」の結果として生まれてくる中間色の問題でもある。著者は、この「越境」から生じるさまざまな現実を紹介し、「仮面を被る」ことを余儀なくされた人々のトラジコメデイを紹介する。アメリカの矛盾がもつとも典型的に露出するシーンといつてもよい。

では、アフリカン・アメリカンにどのような未来があり、どのような希望が文学において表明されているのか。エリスンは、時代とともに流動化しはじめた社会の現実を踏まえ、さらには差別と逆差別が紙一重で互いにかみあう状況をにらみつつ、ともすれば被差別の意識が一方的な独善化へと向かいかねない状況を憂慮する。エリスンはここで、白人の文化を「他者」の文化として切り離すことの危険性を説き、黒人の「自立」や「自己信頼」がけつして自己充足的なものとならずに、「競い合う相互作用」としてつねに機能しつづけることに未来の希望を見る。それこそは、エマソンが予言

的に提示した「個人主義」の理想に他ならないだろう。そして著者は、現に成熟した個人が文学として自立を獲得しつつある例として、ジャマイカ・キンケイドやデレック・ウォルコットの名を挙げ、アフリカン・アメリカン文学の未来はけつして暗くはないと主張するのである。

冒頭に述べたように、本書は、アメリカ文学史におけるアフリカン・アメリカン作家の位置づけという野心的な意図のもとに書かれている。たんに文学に限らず、人種問題というアメリカの根深い悲劇を歴史的な視点からも丹念に描き込んでおり、興味のつきない読み物となつてゐる。ごくわずかな不満が残るとすれば（これはもうないものねだりをいうに等しいが）、著者が主な考察の対象とした『見えない人間』の分析が、おおむね、イメージ分析に留まつてゐることだろう。作家エリスンの資質が群をぬぎ、『見えない人間』がたいへんな傑作であることは広く知られてゐる。また、本書でも作品のもつ内在的な特質については十分に筆が尽くされてゐる。ただ、私見によれば、人間としてのエリスン、さらには作家としての彼の特質とは、ライト流の政治参加を拒むところにむしろ「自立」の可能性を見出した点にあつた。言い換えるなら、たんなるイデオロギーの構築物へと貶めることのない物語を作り出すその巧みさにあり、あるいはその前衛性にあつた。ストウ夫人以来、アメリカ文学で扱われる人種問題のテーマはほぼ例外なくリアリズムの伝統と結びつき、それは時にメロドラマとなり、そして往々にしてイデオロギー小説と化してきた。スカイラーの『ブラック・ノーモア』にしてもおそらく例外ではない。それに対し、エリスンの新しさはそうした

伝統的アプローチを排し、前衛的手法と多層的イメージをとおして、問題の本質に、より繊細に、より微妙にアレゴリカルに迫つてみせた点にある。人間エリスンでも、思想家エリスンでもなく、作家エリスンの文学の真の「自立」は、まさにその表現以外にはない、と見るなら、文体から説話構造に至るより具体的な分析があれば、エリスン文学における「自立」の意味はさらに明らかになつたのではないかと思う。

ともあれ、本書をとおして、私自身の今後のロシア文学研究にいくつかの重要なヒントが与えられたことを記しておきたい。一言でいうなら、アフリカン・アメリカン文学が抱えている問題はけつしてもはやアメリカ的現象ではないということだ。旧ソヴィエトには、多民族文学というカテゴリーがあり、それを果たしてロシア文学とみなすことができるかどうか、といった議論がしばしばなされてきた。ただし、興味深いことに、他民族文学において「オプティック・ホワイト」なり、「パッシング」なりのキーワードに示される差別の問題が前景化されることはほとんどなかつた。ソヴィエトの屋台骨であつた「民族友好」という大義名分が、それを許さなかつたという特殊事情もあるが、理由はおそらくそれだけではなく、スターリンがとつた縦割りによる民族分断政策が「功を奏し」て、絶対的な相互依存の原理と相互不干渉の精神がたがいにくまなく噛みあつていたからと見ていい。ただし、ソヴィエト崩壊後のロシアで今や恐るべき勢いで民族差別が跋扈しつつあることは周知の通りである。

アフリカン・アメリカン文学ならざるアジア・ロシア文学——。あるいは、ロシアにおけるこれこそアフリカン・アメリカ

ンの表象をめぐってひとしきり議論を交し合うことができるかもしれない。蛇足となることを恐れず、一つだけヒントを提示しておく。スターリンによる大テロルが吹き荒れた一九三〇年代の映画の一つに、エイゼンシュテインの盟友アレクサンドロフが監督した『サーカス』がある。黒人の子を身みごもった女性のサーカス団員が迫害され、乳飲み子の赤ん坊を抱えたままドイツに亡命する。しかしドイツでも、彼女によこしまな好意をいだくドイツ人興行主からさまざまな脅しを受ける。こうして彼女は、一座がモスクワ公演中にロシア人のサーカス団員と恋に陥り、二人はめでたく結ばれる。紛れもない国策映画であり、ストーリーもごくごく紋切り型の勧善懲悪劇なのだが、ラストに近いシーンの一つでサーカス場につめかけた多民族出身の人々が、黒い肌をした子どもをそれぞれに両腕に抱え、ソヴィエトの未来を明るく歌いあげる場面がある。私自身、かねてからこの映画のもつ象徴的構造を明らかにしたいと願ってきたが、本書『アフリカン・アメリカン文学』に使用されたさまざまな分析格字を用いることにより、より立体的な意味づけが可能となるかもしれないという予感をもった。

ところで、この映画をだれよりも愛した一人がグルジア生まれで「オセチアの幅広い胸をもつ」（マンデリシタム）独裁者スターリンだった。かつて民族人民委員だった彼は、だれよりも強く「ロシア人」でありたいという願望を抱き、血の出るような「パッシング」の努力を経て、トップに成り上がった政治家だった。知られるように、その彼は、終戦後から最晩年にかけて、ソヴィエトの国是を根本から突き崩すような一連の施策に血道をあげた。すなわち特定の

民族の強制移住や徹底したユダヤ人弾圧（医師団事件）である。この狂気が生み出した悲劇は、いまだ十分には解明しつくされていない。

「建前」が「本音」に膝を折るとき、文化はしばしば消滅の道に向かう。改めていうが、著者が本書で投げかけている問いは、アメリカ社会だけに限られた問題ではなく、空前の「アマルガメーション（混血）」へ向かおうとする地球化の時代に、すべての地域、すべての位相において問い直されるべき火急のテーマである。もちろん、われわれの住むこの「島国」もけつしてその例外として甘んじてはられない。なぜなら、おそらくは私たちが陥りつつある状況とはまさに『見えない人間』の主人公が陥ったそれによく似ているからである。文明と円の恩恵にあずかり、平穏ながらも奢りたかぶった日常性のなかに生きるわれわれは、ひよつとすると、世界のだれよりも「見えない人間」であるのかもしれない。

（亀山郁夫）